

痛切 被災者の声 東北学院大生が証言集を出版



編集を呼び掛けた金菱准教授(左)とプロジェクトに参加した学生＝仙台市泉区の東北学院大泉キャンパス

東北学院大の学生有志が、東日本大震災の被災者71人に体験をつづってもらい、「3.11慟哭(どうく)の記録」(新曜社)にまとめた。岩手、宮城、福島の3県の被災者が、震災当日の状況やその後の暮らしを自らの言葉で記している。広範な地域から震災の実相を描く証言集となった。

本の出版を思い立ったのは同大教養学部地域構想学科の金菱准教授(36)＝環境社会学＝。

震災直後、学生に体験レポートを書かせたところ、さまざまな証言が集まった。「幅広い地域と世代から貴重な体験談を集めよう。学生に呼び掛け、「震災記録プロジェクト」が昨年4月中旬、スタートした。

学生10人が被災地を訪れ、被災者に直接、体験

談の執筆を依頼して回った。地域構想学科を今春卒業した大内千春さん(22)は「原稿依頼は難しい作業だったが、熱意を伝えて書いてもらった」と言う。

沿岸部で津波に巻き込まれた人、ノリの養殖再開を目指す漁業者、石巻市大川小で娘を失った保護者、原発事故で警戒区域の自宅に一時帰宅した学生…。さまざまな地域から、生々しい震災の様子や痛切な思いを伝える原稿が寄せられた。

被災者自身の言葉が持つリアリティを生かすため、巻頭の地図以外の写真やイラストは載せなかった。字数制限は設けず、学生が最低限の補足と訂正をただけで、原文をそのまま掲載した。

メンバーの地域構想学科2年の渡辺英莉さん(19)は宮城県七ヶ浜町の自宅で被災し、目の前で祖母を亡くす体験を寄稿した。「『助けられなかった』と自分を責める気持ちがあったが、皆さんの力強い文章に励まされ、気持ちの整理がついた」と打ち明ける。

金菱准教授は「小さな物語を生々しい文章で濃密に描き、広範な地域で取り上げることで、震災が深く、広く理解できる」と話している。四六判560ページ。2940円(税込み)。